

2013年8月4日マタイ 6:22-24「カミか、カネか」

今日は「カミかカネか、どちらを選ぶか」などと、少しきつい説教題をつけてしまいました。これは以前に、私のクリスチャンの友人がもらった言葉がもとになっています。「結局人間というのは、カミかカネかどちらかしかないんだよ」と、切ない表情で吐き出すようにして語っていました。そして、そういう言葉によって彼が暗に言おうとしていたのは、残念ながらカネを選ぶ人が多いということです。

今日わたしたちの前に二つの道が用意されました。イエス様は一方の道だけを指し示しておられます、それは神に仕える道です。それを選ばないなら、もう一方の道に行くしかない。カネに仕える道・・・聖書の言葉で言えば、富に仕える道。カミかカネか、神か富か、どちらかを選ぶしかない。どちらかにしか行けない。そんな極端に考えなくても、現実的に考えれば両方バランスよくお付き合いしていくことができるじゃないかと言いたくなる。神に仕えるというのは、キリスト教信仰をもって歩むということですが、それはなにも貧しい修道生活とイコールではありません。先週も申し上げましたが、クリスチャンがこの地上で賢くお金を貯えたり、仕事をがんばって稼いだりすることは決して不信仰なことではない。むしろ、神から与えられたタラントンを上手に活用するという意味で、聖書の教えにかなっている。神に仕えるというのは、富を否定して生きる、ということではない。しかし、それを踏まえた上で私たちは今日よくよく覚たいのは、両方とバランスよく付き合っていくという考え方は決して成り立たないということです。時にはこっちの道、時にはあっちの道という意識ではいけない。両方に仕えることは「できない」と言われています。「ならない」という命令ではない。そんな器用なマネは不可能である。こう言われるのは、富の魔力をよく知っておられるからです。両方の道を行ったりきたりなんて中途半端なことはできないのです。一瞬でも富のほうに心が向けば、もうそっちの道から戻ってくることはできません。だから、両方に仕えることは不可能です。神に仕える道をはっきりと選び取らない限り、私たちは誰もが、富に仕える道へと導かれていき、もう戻ってはこれません。そしてその道は、決して幸せな道ではないのです。

改めて、富に仕えるとはどういうことかを整理しておきましょう。富と訳されている言葉は、マモン。英語訳では訳さずにそのままマモンとなっています。まるで人の名前のようです。実際イエス様の時代にも、まるで人格をもった霊的存在であるかのように、マモンというものはとらえられていたようです。日本流に言えば、大黒様とかエビス様とでもいうような、富、財産、お金を象徴する、偶像の神のようなものとして考えられていた。だから、日本語の翻訳でもここは富というのでなく「物神」とするという案もある。そしてこのマモンは、非常に危険な存在です。人間を物欲、金銭欲のとりこにしてしまう、恐ろしい魔力をもっています。

このマモンに仕える。これは端的に言えば、奴隷になると言う言葉です。物欲のとりここと申しましたが、まさしくとりこになるというのは、魂を奪われて、支配されてしまうということです。隷属するということです。そう聞きますと私などは、0.1秒単位で高速取引される株式

売買ですとか、はげたかファンドですとか、金融工学ですとか、お金の亡者のはびこっているような世界をすぐに思い浮かべるのですが、何もそういう特殊な世界だけではない。お金や財産への執着という意味では、経済的に余裕のない人のほうがもっとはげしく、マモンに魂を奪われているということがあると思います。多くの人にとって、お金というものは、不安から助けてくれる救い主です。インターネットでは、年収が1億になる方法とか、そんなうさんくさい宣伝があふれていますが、この間も「一生お金に困らない個人投資家という生き方」なんてページがあった。そこで一番最初に書かれているのは、どうして私たちはこんなに不安なのでしょう？、「このままでは将来年金がもらえるかどうかわからない」「会社に定年まで雇ってもらえるかどうか不安」「このままでは国債暴落や通貨危機が起きるのではないか……」など。現在の生活が維持できない不安、つまり、お金に対する不安に悩んでいる人が実に多いのです。でも、私は個人投資家になったおかげで全然不安はありません・・・なんて調子で、調子のいいことが書かれていて、最終的には詳しくはこの本を買ってくださいとなっていく。確かに、誰もが不安におびえている時代、その時代の救い主はマモン、オカネであると、誰もがその力を信じ、愛しているのだと思います。

けれども、それは決して正しい信仰ではないのです。マモンに隷属してはなりません。このマモンにひれ伏して支配されてしまうならば、人間はしばみず。魂が貧しくやせおとろえます。愛が冷えて、自分のことしか考えなくなります（そういうのをケチと言う）。オカネのためなら何でもやると、不正に手を染めていきます。愛だの正義だのというのは、すべてはキレイゴトだと軽んじられていきます。数年前に、あるテレビ番組の中で、ある金持ちタレントがこんなことを言っていた「お金がすべてではないなんて言うのは、大体はお金を持っていない人間なんだ」。マモンというのは本当に恐ろしいなあと思いました。そのように臆面もなく言い放つ傲慢さを、人間の心に育んでしまうのです。またもう一方で、確かにその通りだなんて、そういう言葉に反論できずに笑っているしかないような、惨めで、卑屈な魂を育ててしまう。それが、マモンの奴隷に成り下がった人間の姿です。それは人間として、決定的なところでおかしいのです。

まあ確かに、お金がすべてではないとは、お金を持たない者が言うのかもしれませんが。でも私は、その反対も同じだと思います。お金がすべてだとは、お金しか持っていない人が言うのです。そういう人は、本当は自分自身の魂の貧しさを知っておられるのではないのでしょうか。愛されたいのに愛されない、そういう飢え渴きが自分の中にあるのではないのでしょうか。でも、そういうことにちゃんと向きあうことから、多く的人是に逃げておられます。お金がすべてだ、そんな風にうそぶくのも、そういう自分の貧しさから目を逸らそうとしている人の、後ろめたさのあらわれのように思えてなりません。そのような人は、人間としての本源的な喜びを見失っておられるように思います。神を見失うなら、そうなるのです。

イエス様は、神に仕える道を行きなさいと、いつも指し示していただきます。人は神様のもとで、神様と共に生きる時に輝きだすように創られたからです。人は、神のもとに帰ると

きに、はじめて魂の安らぎを得るのです。神様から離れているかぎり、どれだけお金があっても満たされない、根源的な不安が続きます。神に仕える道に進んでいただきたいと思います。私はいつも申し上げるのですが、聖書の言葉というのは、私たちの取り扱い説明書のようなものです。人間を創った神様が、人間はこういう風にする輝きだすという説明書を書いてくださった。それは全部、この世にあってキレイゴトと呼ばれることです。わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。隣人を自分のように愛しなさい。愛するというのは、口先だけではいけません、具体的にその人のために自分の富を使いなさいと言われます。自分のお金を使いなさい、時間を使いなさい、能力を使って助けてあげなさい。どんなにお金に困っても正義を優先しなさい、盗んではならない、隣人の家をむさぼってはならない、そういうことをすれば、人間は故障してしまう、あなたは壊れてしまう、そのようにできている。どれもキレイゴトと言われることです。でも、この神の教えに従って生きることができた時、私たちは、今まで味わったことのない、深い深い平安を得ることができるのです。人間として生まれてきたことの、本当の意味と目的を知るのです。イエス様は私たちに、その喜びを味わわせたいと願っておられます。その喜びへと導くために、十字架で死んでくださいました。

神に仕えるか、富に仕えるか。カミとカネ、どちらを選ぶか。残念ながら、今は、カネを選ぶ人の方が圧倒的に多い。これからさらに増えていくことと思います。でも、その道は、必ず人間をやせおとろえさせて、永遠の滅びへと至らせる道です。神に仕える道をおすすめします。

もう時間がなくて十分お話しできませんが、今日読んだ御言葉の最初のところには、目の光についての言葉がありました。「体のともし火は目である。目が澄んでいれば、あなたの全身が明るい、濁ってれば、全身が暗い。だから、あなたの中にある光が消えれば、その暗さはどれほどであろう。」ここで言われている目というのは、心の目のことです。目というのは生命力のバロメーターですから、目が輝いている時は元気、反対に病気などになると目が濁ってくる。そのように、心の目が濁ってしまうならば、あなたの存在全体が暗くなるといわれています。澄んだ目が必要です。ここでの澄んでいるという言葉は、もともと「単一の、単純な、シングルである」という言葉です。あれもこれもではなく、ただ一つのものを見つめることです。そして見つめるべきは、神です。地上の事柄ではなく、天を見上げるのです。そして天に約束された、不滅の希望を見つめるのです。真心を込めて、ひたむきに、まっすぐに。お金の魔力に惑わされないで、地上の宝に目を奪われないで、神を見つめ、その道にしたがっていく。そのとき、あなたの存在全体が必ずや明るく輝きだします。

目とは、信仰の目

心と言ってもいい

そこが曇れば全身暗い、

神を見失うなら、目は光を失う